李寧
集解 改正月令博物筌 九月部 三

5
529
11

九月部目録

○養生の法○雨風の考○米の豊凶
○妙薬○季とりとめ祭其外人家の季と特りかえ
△印ある八非譜

重宝のつゝしハ処々ふ数多あり
ゆへ目録ゑられとまるさす

九月　月支・調子　陰陽生　異名並註　四十九

△寒露節　三丁
△霜降中　三丁

日令　此部ふハ九月日の定りなく
毎年の定りなくとまるす

○袷　三丁
△御香宮祭　四丁

△鞍馬祭　四丁
△都野神社　四丁

五日
△醍醐祭　五丁
△木幡祭　五丁

七日
△不堪田姜　五丁
△桂宮相撲　五丁

八日
△醍醐霄祭　五丁
△重陽節　△重九　△菊酒

△菊天　△菊節
△栗節　六丁

△菊花宴　△重陽宴　△菊の酒　九丁
△菊瓶　△茱萸袋　十一丁

門 = 5
529

九月 目録

△菊の着綿 七丁
△佩茱萸 八丁
△菊花宴 八丁
△行くらめ酒 八丁
△京醍醐祭 九丁
△鹿谷天王祭 九丁
△一宮祭 十丁
△千日菊 後日菊 命婦菊 蔵の菊 十丁
△近江四宮祭 十丁
△下鳥羽祭 十丁
△御難餅 十丁
△後名月 十三丁
△太素牛祭 十三丁
△例幣 十丁
△九日小袖 十丁
△小重陽 十丁
△五條天神祭 十丁
△生玉祭 九丁
△貴船祭 九丁
△後雕 九丁
△天王寺念佛会 十三丁
△白川祭 十三丁
△住吉相撲會 十三丁
△宝の市 外宝の市 十三丁
△天王寺乗會 十三丁
△京都岩倉祭 十三丁

△後の月 △豆名月 △彩名月 △二夜月 △名残月 △十三夜

△栗田口祭 十四丁
△神田祭 十四丁
△小倉祭 十四丁
△岡崎祭 十四丁
△廣會新嘗會 十四丁
△桂川御祓 十五丁
△野の宮別 十五丁
△摂津穴綾祭 十五丁
△摂津呉服祭 十六丁
△城城南神祭 十六丁
△婆利女祭 十六丁
△旅夷祭 十七丁
△八幡花頭 十七丁
△上難波祭 十七丁
△淀祭 十七丁
△座广祭 十八丁
△逆神祭 十八丁
△天満流鏑馬 十八丁
△北山祭 十八丁
△津村祭 十八丁
△鳴滝祭 福を神祭 九千八丁
△住吉神送 十九丁
△周防山口祭 十九丁

月令 九月

此部ハ八日の定うざる九月一ケ月のこゝ孤あつめしるす

△伊勢御迂宮 十九丁
△番船 △絵番 △早舟 十九丁

△落水　九ノ廿七丁
△海驢廻　九ノ廿七丁
△新綿　九ノ廿七丁

時令

此部ふゝ九月の時節ふゝ
つゝゝゝ霜るゝのこと迄出ス

△暮の秋　△秋深し　△冬ゝ初　△冬ゝ
△冬を隣　△冬ゝ　九ノ廿七丁
△九月尽　九ノ廿三丁
△野山錦　△山紅葉　九ノ廿三丁
△秋霜　九ノ廿三丁
△露霜　九ノ廿三丁
△露時雨　九ノ廿三丁
○露寒　九ノ廿三丁

草木

此部ふゝ九月一ケ月の草
木の類をあつめしるす

△菊　△白菊　黄菊等菊
品類かづくゝあり　九ノ廿三丁
△菊合　九ノ廿七丁
△菊花香　九ノ廿七丁
△地榆花　九ノ廿八丁
○川芎花　九ノ廿八丁
○黄芩花　九ノ廿八丁
○岩菊花　九ノ廿八丁
△蘆穂　如糸　九ノ廿八丁
△薄散　九ノ廿九丁
△椿の実　九ノ廿九丁
○楠の実　九ノ廿九丁
△密柑　九ノ廿九丁
△柑子　九ノ廿九丁
△九年母　九ノ卅丁
△金柑　九ノ卅丁
△温州橘　九ノ卅丁
△佛手柑　九ノ卅丁
△榲桲　九ノ卅丁
△南天燭子　九ノ卅丁
△罌子桐実　九ノ卅丁
△皂角子　九ノ卅丁
△木欒子　九ノ卅丁
△菩提樹　九ノ卅丁
△川楝子　九ノ卅丁
△桐油実　九ノ卅丁
△椋実　九ノ卅丁
△槇榁実　九ノ卅丁
△栗子　九ノ卅丁
△毬栗　九ノ卅丁
△落栗　九ノ卅丁
△狐栗　九ノ卅丁
△茅栗　九ノ卅丁
△栗子餅　九ノ卅丁
△錐栗　九ノ卅丁
△三度栗　九ノ卅丁
△榛子　九ノ卅丁
△櫟子　九ノ卅丁

△椎　九ノ三十丁
△椎の葉　△椎の小枝　△椎ていさる
△新胡桃　九ノ三十丁
△新松子　九ノ四十丁
△茱萸　九ノ四十丁
△榎実　九ノ四十丁
△無果花　九ノ五十丁
△仙蓼　九ノ五十丁
△濃子　九ノ五十丁
△色付く松　九ノ八十丁
△千土生　九ノ九十丁
△緑豆引　九ノ九十丁
△牡丹　九ノ四十丁
○小蓮花　九ノ四十丁
△椎茸　九ノ三十丁
△圍栗　九ノ三十丁
△新榧子　九ノ四十丁
△水木子　九ノ四十丁
△瓢箪　九ノ四十丁
△熟柿　九ノ五十丁
△鴨上戸　九ノ五十丁
△晩稲　九ノ五十丁
△紅葉　△種きびろくあり　九ノ五十丁
△破芭蕉　九ノ九十丁
△うゝ枯　九ノ九十丁
△蕎麥刈　九ノ四十丁
△佛甲草　九ノ四十一
△菊弱花　九ノ四十丁

△梔實　九ノ四十丁
△梅嫌　九ノ四十丁
○木うへ付　先ニ用意　九ノ四十丁

生類　此部ハ九月一ヶ月ヨロクの生るいとあろえしるを

△尾越鴨　九ノ四十丁
△熊栗棚かく　九ノ四十丁
△霜踏鹿　九ノ四十丁
△紅葉鮒　九ノ四十丁
△射祭獣　九ノ四十丁
△魚介永為蛤　九ノ四十丁
△細代打　九ノ四十丁

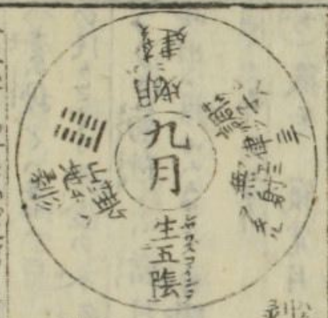
心用　此部ハ風雨の占○破軍のむこへ方○日ごろのよう色祝行の心得○作事のよう地一ノ養生○衣服の式○生花の式○料理こん立の法食物のよう等其外品々あり尤日乃定アこゝろこゝロの日今の部ハあり此部ハ日のさゞめ〳〵ゝ用の事とよろ先しるを

△紅葉衣　九ノ四十丁

九月目録終

九月之部

△印付さる八世日が俳諧季寄出て用ゆる事なり



剥ぶ群陰陽と剥ぶす月なり

剥て乾き花枝葉とらて枝幹凋しく剥落ずるる

無射は陰気外陽気降て萬物陽気に隨ひて出て貪るべし

蟄虫魚の類蟄伏し草木根に帰り潜むなり

射てくるべ乃て無射と云

異名

△季秋 礼記○暮秋 留青采珍

△梢秋 四時纂要 晩秋 韵府

△無射 礼記△寒露 韵府△玄月 事物異名

△素秋 韵府 菊秋 事物異名

和名

彩月○紅樹月△菊月

△菊開月△寝覚月△紅葉月

△木深月△小田刈月△撫の秋

△長月 これい能はハ八月九月可うくべ一ろけハ八月の口ふちらす

異名註

△季秋は季の末く秋のことゝ云てくし　○暮秋くは秋の暮なるゆゑにして夕の暮にていふ　年の暮くは年末

秋を玄の秋とも　△梢秋くは梢の秋　△晩秋は暮秋と同一

ろぎく　△晩秋くは梢秋くは李秋　△無射は晩の秋といふ事なり　△寒露は節の名なり

上ふ之り　△玄月とは玄はクロシと訓黑きは純陰の色なりよりて玄月と云

△素秋とは素は白一秋乃金気のはたらきなる処金の本色白なれ

ゆゑ　○菊秋くは當月は菊花乃咲出る月ゆゑなり　菊開月くも

同一ゆゑなり

(ろ)藏玉　寢覚月　家隆

いく秋かわれ一枝の衰さあり月

秋くはいたくはめもゝ秋とゝ

祕藏　彩月

月ふるはいろ月ふるはいろ

菊開月

莫傳　菊果てくるゝ

菊花月はそこ

雪玉集　梢の秋　木末の秋　実隆

梢の秋は枯れくふの月

莫傳　紅葉月

ひとしくふの月

新古今　長月　花山院

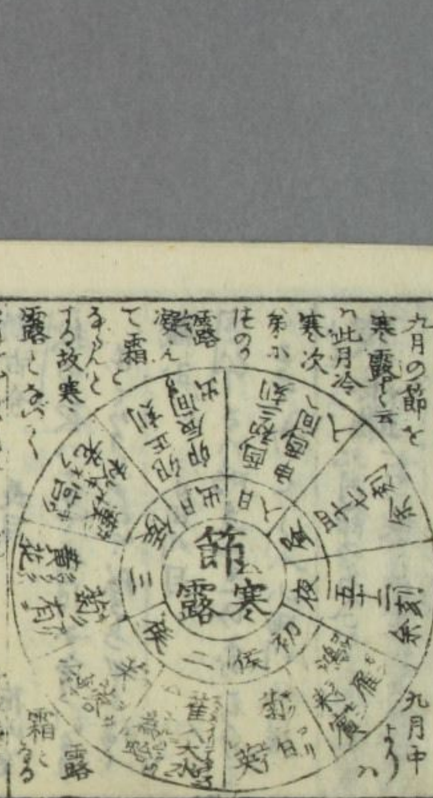
秋の夜はいとゝ長月ふるはいとゝ

藏玉　小田刈月

さは晴天なるの月

寒露　九月節の名〇七十二候〇艸木七十二候〇昼夜長短立記

九月の節を寒露といふ此月冷寒次第に深まるなり



鴻雁來賓といふ雁は仲秋先來るものなり季秋ふるして來るなり○菊有黃白二色なり

英づると云△蕎海に入て蛤と化して潛物となる故に潛物

△鳥は天の理を又動物となるなり故に潛物

穴居ぜり○潛物とは蟄虫蝶と變ず皆

天道の盈てるを忌て謙

益をして不足に補ふ盈つるを

咸を故に飛ぶ物は潛む所謂如の

斯○芙蓉冷ゆ○荷葉枯

破れて使ず樣物凄く冷ゆ

○菊有黃花といふ既に盛んな

開くと云ふ黃は菊の本色な

るべし○漢宮は漢の代の宮

女の物がなりしとて

るふたくて秋ふるくなるふ

ゆて婦女かりの

頃ふるるところをいふなり

節天氣占候

此月巳午の方より雲出る

は必風ふくし北西の風は久しく

吹こと及風の後は雨ふること此

月のうせん○十一日十九日十七日必

風雨のある日に當るれば米貴し

虹蘇の價貴五穀もいたし

月蝕あれば年あれて凶年なり

霜降

酉申○七十侯○卅六七十二侯

△晝夜○晝夜の長短を記す

節ゝり十六日目と霜降と云ふ破軍星戌に指す露結んで霜となるゆゑに霜降と云ふ

○豺は山犬〳〵云狼〳〵尤性よろし〳〵及獣の類を殺して天を祭る〳〵○芰は菱の浮葉なり荷は蓮の葉なり故に枯て化して枯て羅の字を書く故に化して枯て羅の字を書く故に化して枯て羅の字を書く故に

朔日 京 都 鞍馬祭 今日出神輿渡御 祭九月

御旅所へ御出九日まで御輿

明神と云○大己貴尊とゝろまつ

朔日 大坂 ○天王寺 金堂 會釈講 平刻音楽 安藝 ○宮嶋 今日市あり

南都 ○氷室祭○南都四十四社氏神と祭日は春日伶人舞楽あり 大和志

○春日若宮御縄棟の式今日あり

若宮御旅所は常は今見假殿宮

二日 ○今日晴れいい来年春雨お

ろ〜○今日房事を慎べし

南都 ○東大寺 鎮守八幡祭此祭

久〜〜退轉せ〜ゞ京都天明

火災の後故有て再興せられ

ゝり昔は復そ嚴重なることゝ

三日 ○北斗に御燈と奉らること清の

(秀) 年中行司 貞世

よ向ゝる星のひろにほうふる

ゝ秋のゝり〜火

京 ○大通寺六孫王御出○多賀神観

都 音堂水仕○山城国まつり

四日 京 ○北野芋茎神輿○北野天

都 神祭は八月なれども今は絶さ

ゝ今日氏地より芋茎御輿にて菜

菓とりて神輿に進ぜ渡御のまゝ

○萱尾明神祭○醍醐のまつ

五日 山城 醍醐祭 御出今日より

○萱尾明神祭○醍醐のまつ

みの日野にあり

木幡祭 大明神と号く天忍

骨奥〜宇治郡木幡の里有

六日 京 ○高臺院殿忌○大閤秀吉公の

都 政所へ高臺寺方丈かて戒法あり

七日 不堪田炎 昔は諸国の田の損

亡ゝろ所々の日録

をして奉るゝれかつきて租税と免

ーゝ〜〜あり○作らふかゝる田と

いへ心ゝて不堪田と云あり 全事根源 (秀) 年中行司

ゝ秋ゝ子ゝ所のゝ〜れ数

とゝへてけくふかゝ人ゝ坪付もの一
(能)而此の名所一の古や不塔田 荷分
京○久世祭の久世の神社久世郡寺
都田村の氏神寺 西の岡久世村条
(云)万葉 やはらの久世の社の麦ゑりそ
れ井の清さゝ色もゝ人ゝれ折そ
遠江○中郷祭又飛神祭とも云。祭神
春日明神太玉命と合せて五社明神
上 卯 占候 北風東風吹けば来年
三月七月米價貴一
八日 桂宮相撲 六条北西洞院西
京○泉涌寺舎利會。湛海といへ
都僧嘉禎末宋より持かへり舎
利をつくり此日音樂あり泉涌
寺に台密禅律の四宗あり
○玉水祭○山城国牛手の郷
玉水乃里なり
江○勾當内侍祭。堅田の浦か塚あり
州夜祭又内侍へ新田義貞の妻へ

醍醐霑月祭 今夜社前そ能三番あり霑宮能と云
九日 不成就日 重陽節即 △重九 △菊天
△菜節 △栗の節句 栗ゝこゝ
昔ゝ天子南殿に出御ありて今日
節會行はれて韻を探りて文を作り
文墨に居て講ぜらる未女ゝ裁衣事
今日を重陽といへり九ゝ陽の色
数なり九九ゝ陽重るゆへ重陽
といふなり ○重九といへ九九重る
故聲に憑りて名づく ○一説に
重九とは是ゝ俗に長久といふ
同音なれゝ祝ふなるべし
菊花宴 △重陽の宴 △菊酒
△菊瓶 △茱萸袋
今日群臣菊酒をのべしおり
茱萸の袋を身に佩び又ゝ茱萸
の実の付たる枝を折て頭にさゝめ
ゝ悪氣を去ると云風記 次に故豆有

重陽の事 并に菊花酒造る法 故
支詩等委し 日本歳時記す

出と見る面一

○二日 端午 七夕 重陽は昔より
陽の月陽の
祝ふく右四節 ものに餅端五の粽
日なり是陽に責び陰に
意なり又上巳の
長陽の菊酒 又栗等其節の物
故是と食ひ又は送ることし
其日の佳節と祝ふなり 草木子出る

内大臣

(秀) 年中行事

ゆきすぎ行くに日とともうそへて
ゆくたまかつらの酒のさかりき

新院典侍

玉葉

行とをの杉はなかりて九重の
ゆきもとめられきくれきうつき

慈鎮

風雅

ゆくとしはきくに菜とたのふ
かさもあり紅ふくり

(詞) ゆくのちきく。菜はさうよ。

月のゆくとさくれきく。ゆく
さくきく。ゆくとくしろ下ろ

(連) 行のふかけはくるかるせいや菜の外宗祇
(俳) かりけのくるかるせいや菜の孔其角
裏むすふもも果とゆくの菜を考
かりけ庵のゆくやゆくのかきく 全

(狂) いのへのゆくはゆくの菜の酒
ゆくゆくのいくひふ 正定

菊の着綿

枕草子ふ九月九日
の菊と綿とすし
の綿ふつゝて糸らせるとこゝ
此日の式と調んとて前日より花
ふ綿とときて風霜と隔く
り此日菊の開ぎるこもあれ
綿と菊の大きくしていろく色と
はきもておるこふもまりろく
今も撰大内よい菊乃ときせて
式宮女は手ぞさひと色
たまふ

(俳) 黒綿や髪ふ絡れて大笑 道古

(弓)かけ置一条の綿をそのうへにおりそいくそ春のあめにぬれぬる　相模

九日 故実

佩萸

此日茱萸ヲ佩ビ菊花酒ヲ呑ムヿハ費長房ガ桓景ニ災ヲサケル術ヲ教タル故事ヲ由来トス此事甚論アリ委シク日本歳時記ニ年明ス

○唐土ニハ今モ今日山ニノボリテ此酒ヲ呑ミ婦人茱萸ノ袋トカヽヘ事文類聚ニ出ヨウ

菊花宴

周ノ穆王ノ愛童ヲ慈童ト云シガ罪ヲ蒙ムリテ酈縣山ニ謫サレタリ此山谷ニ菊花充満セリ慈童常ニコノ菊ノ滴リヲ呑シガ終ニハ百餘歳ノ寿ヲ保チ魏ノ文帝ノ世ニ出テ彭祖ト名ヲカヘ文帝ニ此術ヲ授ケ奉リシカバ文帝コレヲ受テ百年ノ寿ヲタモチ玉ヘリ斯ル例ニヨツテ今日菊花ヲ酒ニヒタシテ用ユレバ壽ヲ二ストヽ云傳ヘタリ　委シクハ日本歳時記ニ出タリ

(詩)重陽五字對句　同上

臨風孟嘉帽　香遍謝公衣

乗興李膳丹　花濃陶令籬

客中愁　献酬杯

詩礎

(詩)八字七字對句

今日暫同芳菊飲　明朝應作斷蓬飛

(詩)重陽之詞　崔国輔

秋葉風吹黄颯々　サラく晴雲日照白鱗々　トチル　ソラノハレタル中ニ白雲カアルソレヲ日ガテラセバシロイイロガキラくトミル

歸來得問茱萸女　ヲオヒタ女ニトフタレハ

今日登高醉幾人　今日ヤヘノボツタヒトヲイクタリホド酒ニヨハレタソ

(狀)九月節句之尺牘

九月　日令

重九鄭重々黄花馥郁偶有
送壷酒客敬待公之曳藜於
叢間催風月與趣連々玉韻訶々

重九　佳節○九日○登高日
九日ノ一　山ヘボル日

○萸節○九々良日○黄花佳期
九月九日ノメデ　キクノサック

鄭重　至祝つ嘉幸○致歓く
メデタク　メデタク　メデタク

○申悦　送壷酒　贈孤樽○以
ノブヨロコブ　オクル　コシュラ　スコシサケヲオクル

酒甕　曳藜　寄駕於蝸庐
イッポン　オイデ　ヨセカブ　サッタベオンイデ

○来叩蓬戸　風月興趣　尋芳
サックベオイデ　オモシロキヤソビ　タツネハラ

玩景○寄趣烱霞　連々玉韻
オシイデ　日上　レンくキョクイン　ユルくオサクル

自作口頭吟○五七言之芳韻
クチヤサエノシラツクル　ユゴンセゴンノオサク

九日

あくめ酒　今日よりハ式事の酒もつくめて用ふ

世諺問答ふも出さう○抑元旦の屠蘇酒と用ひらくよう桃花菖蒲の酒きて式正ハ冷酒を食物本草にも酒ハ冷飲ふ宜しとて冷酒のこと用ゆると貴ハ

(俳)あくろろ々ふとハ酒の冬ふル　雪水

九日

後雛　雛のこハ三月の部ふ委しく出せう

(俳)南カとう百ふて笑ふ雛ふる鼠月と月の中ふ生ろや接ろひる蓬

(狂)ぜりちて寒とろふ入こ〜ろと妹風ふ出ろ浦のひなの郷　貞柳

九日

京都醍醐祭　下醍醐長尾天満宮郷中の氏神さん

○上ぶくへご清滝権現ハ護法神ともふ今日神輿と渡とて下れぐご

天神の社頭ふ能あり。笠取山の山上山下に鎮座ろり

(参)西そくくちはと云ふあるいは向
笠丸山の淺間のこゝや　慈鎮

九日 貴船祭　祭神二座高龍○奥御前○當社ハ龍
德の無跡ふしぎ雨ご祈て雨を止
むる事を所る御神なり

(号)新古今　わたの江の岡のうるほさうぜんに
うのて井ぜんふそうの江上の秋　加茂宰平

九日 鹿谷天王祭　○淨土寺村十禪師
ほうりともいふ
祭昔ハ北四日なれども今ハ九日
なり京銀閣寺門前ハ十禪寺社あり
○中村祭○長谷の内なり夜ハ入り
行なり故俗ハ盗人まつりといふ

九日 大坂生王祭　祭神活玉神ハ今日流鏑馬等あり

九日 河内一宮祭　平岡神社と云祭
外和州春日同神ハ
○科長神社○祭ハ六月八日九月
九日ハ山田村東條ハあり延喜式に出

肥○長嵜諏訪明神祭○傘鉾
前踊等あり甚ハ十日ハ鹿解
そ九日ハ供ぐろ殿とさて各拝
殿かて鹿と看とて酒と呑ふ

播磨○明石大倉谷稲荷神社祭
祭日ハ三人牛ハ乘つて社頭へ
乘る例式なり　ゆくゑ牛乘祭
くもつみあり

九日 天氣　九日ハ晴と至る雨降と
ハ晴なれハ冬至並
來年元日雨日晴天なれ冬中小雨
も少なし若雨降ハ月中降ハ人若
降ハ豐年の兆なり○終日東北
の風あれハ豐年ハ西北の風ハ來年凶

九日小袖　御湯殿記日九月九
日なり縹色小袖を着を小袖と
云ハ綿入なるのことなり

十日 十日菊　後日菊　後菊
残る菊○残る方

菊は九月の佳節ふ即ふ用ゆう物うふ
れて十日ふ用ゆうとつく禁中
残菊宴あり

(歌) 千載　基俊

今さえれいさるうう霜だにてきて
菊さひもく赤く葉のえれ

(連) かけとめて朝てふかうくの朝きれ昌休

(俳) いきれ十日の酒れ亭主ふ其角

(狂) 九日のもいもちまう十日まへ
かうくろふうろひまり　冠里

(詩) 十日菊五字對句　詩礎

開運　陶公與
餐英楚客詞
秋すゝの落花ヲ食ハ楚ノ風ケンノコトバヲ作リ
蝶尚狂　同チウザン
蜂猶探　十月殘芳　三テ三チ三ヲ

十日　小重陽　唐士ニハ京俗今日會
朝ふてい後宴くいつ
○今日よりたびとそくべく

十日　江近四宮祭　神體彦火火出見尊
大津四宮下ふあり引
山十四番行り物くやく造花等出る
近郷ひびき京祇園祭の山鉾ま
わくろくいる大津第一の大まつく
○大津高山寺若宮祭

十日　京都五條天神祭　祭る所。少彦名命ま
あとそ京師乃俗このやく後
と天使の社くいム

下鳥羽祭　山城国宇治郡下鳥羽ふあり午頭天王
と祭る田中天王と名づく

(俳) 小ゐるの蚤や蚤れ書ふゆくれ　蹴水

十日　若○遠敷大明神祭。祭神上の宮ハ狭火火出見尊下の宮ハ豊玉姫ろり

十一日　例幣　天子ようり伊勢大神宮へ御幣と奉てあム
例年のごとくれいかくいろり孝
徳天皇こそ此使と制ぜらる
例幣使ともつく
(俳) いろ唐月るもうけよ例幣廿又風鈴軒

(狂)冠の礼とゝのさくとめさまる勅使あり　百二

十一日　京　○六孫王権現祭。八條芝辻都寺ふの六孫王経基公と祭る

十二日　御難餅　○日蓮上人七字の題目とゝなへ一流の宗門と立て安国論と著へて諸宗とそしる故ふ平の時頼怒て伊豆ふ流と三年ゝして免され鎌倉ふ帰て尚諸宗と誹ふふよりて弟子ゝゝふ土の牢ふ入ること二文永八年九月十二日鎌倉龍の口といふ處ふて首と刎んとす時頼の子ゝ孔と聞て其後大赦ありて帰る上人遷化の後弟子の僧竜の口ふ寺と建るこれと龍口寺といふ今日泰詣多ー像の前ふ餐と供ふ今日難ふあひたる日ゆへ今日そなへる餅を御難餅といふなり

十二日　京　○太秦廣隆寺都太秦牛祭　いふ桂宮院

内ふ伽藍神あり大酒神ゝ云聖徳太子川勝ふおゝせて建る処く摩多羅神と祭る日なり上宮王院の庭ふ於て紙の衣と着て牛ふ乗て高声ふ祭文とよむ此祭文甚詞へ委くハ追て補遺ふ一つす

(俳)ゆえ知ハよゝ孔流して牛糸ふ　素堂

牛糸ふやの口ろく皮つゝミ　桃隣

十二日　大○多武峯祭の田身嶺寺和本殿の中央ハ大織冠鎌足公ゝ

十三日　今日晴ゆれハ晴久ゝつゝくそ残て綿ろくこと多○雨降ハ冬雨雪多

後名月　△後の月△豆名月△栗名月△三夜月△名残月

△十三夜。此夜の月と賞とる事寛平法皇よりう始まるう保延元年九月十三夜ふハ雲いさゝ有く月明ゝ明月無双のよー仰

出されしよう今日と明月と
いへ中右記ニ出　鳥羽天皇保安二
年ニ関白忠道公九月十三夜の月
を賞し給ふ詩あり歳時記ニ出
○五雑組曰上巳有風梨有蟲中
秋無月蟬無胎九月十三夜晴ハ
釘軌掛断縄くいろり其外説多
日本歳時記ニ委しくされハ畧之
○民俗今夜ハ豆と栗とを食ス故に俗ニ豆名月
とも食を兼て委しく歳時記拾遺ニ
いろ〻書ニ出さう面白さ〻なり

(言)續後拾遺　二夜月

ちとせといふと私のまれてきたる名は
こよひもつきとなるかなさ　頓阿

草庵集

あはれ〻けさ世代のくもの結ひや
月も名ハおふこよひのつきん

(連)五月雨の名残の色月の二夜に宗碩

(俳)あるこの蔵ものきの色ハ後の月　仁

俳ひさ本の風ハたそうな板の月　朔蘭

豆を食て豆の花も咲めるや　惟貫

物くさしなれもさびし後の月　去来

義経ハ名をそ惜るうのられ月　乙由

(狂)名月ハよう似る月の新つきハ

二ツちゃひのとく〻　草月　金波

(詩)九月十三夜詞　林春信

季秋逢遇十三天　末ノ秋ノ中デコヨヒ十三夜ノ空ニ
月ヲミルトキニアフタヅ　明月無雲自粲然ノ明
月ニ雲ノサハリモナクテ　今夜似星残菊
オボロカラ光リガアキラカナ
色　コヨヒ星ノヤウニミエル　蟾光相映一樹
残キクノイロヲミルハ
前月ノ光リニハアテラランカノ
ヘニキラ〻トスル

十三日　大坂住吉相撲會

△今日神輿堺の宿院へ渡御
ある相撲十三番ある故ふとまつ
會〻いふ今日社頭ハ外でう鉢と
離ハ是と宝の市しつの市笑安
の神あり諸国市の始めとん
(俳)社家へて分別うる用えを芭蕉

△宝の市。
△外の市

(狂)年老て杖にすがりてこれをもて人の宮をまもり 貞柳

十三日 京都白川祭 祭神天満宮(白川村南の方)有馬の生土神なり 昔は今日修行せり

十四日 大坂天王寺一乗會 ※れども今は絶えたりとぞ中世より十五日大念佛會を行なわるる

十五日 大坂天王寺念佛會 今日未の刻六時堂にて修行を太子の鳳輦と六時堂ふうあり奉り舞楽あり當寺にて盂蘭盆會聖霊會今日の念佛會とつづいて最重のもの

法會あり俗ふ(祈)祭なり

○三津八幡祭 ○玉造稲荷祭

十五日 京都岩倉祭 北山の岩倉山にあり祭神十二座なり北岩倉大雲寺の鎮守なり昔は王城の四隅ふ岩倉ありて社を

たて帝都の守護なり是は其一なり祭礼夜ふ入神供を奉る

十五日 京都粟田口祭 ○午頭天王を祭る鉾十七本あり 昼は粟田御殿ふ入り夜は白川橋を越て知恩院さくらの細道板橋を渡るなり山上まで鉾の曲特なり甚面白きなり

十五日 江戸神田祭 天平二年ふ大己貴命と鎮座往古は神田なる国々ふ大神宮へ初穂を納むる御田あり大己貴命は五穀の神なれは右神田よは此神を祭るへ其後延文の頃より將門の霊を本殿のかたわらふ祭りて今二座なる祭りは隔年なれど子寅辰午申戌ふ山王祭と此祭と江戸の大祭なり

(俳)こんにちは神田の祭 本さん

十五日 豊前小倉祭 祭神三座(應神天皇・神功皇后・玉

依姫なり十四日神輿かり殿ホ渡御
やぎめあり夜ゑ祓あり十五日祭ん

十六日 △城山岡崎祭 東天王の社と云 西天王の社ハ吉
田山の麓ニ有鉾七本あり神輿ホ
先達てゆく是と鉾ともろ〻〻
其内一本の鉾鉾ばの上ホ土をそ
つくり大鷹とみく名づけ大鷹
の鉾〻いつて神宝とす 雍州府志出
一書ホ祭ハ九月十五日〻〻〻〻

○伏見三洲祭。天武天皇と祭
〻〻又午頭天王ともいつり十二日ハ御出〻

○岩屋明神祭。神体宮道祖
神〻山科大宅村の東ホあり

十六日 △度會新嘗會 ○神嘗祭
なり今日
伊勢外宮ハ天子より新米の初
穂と供ふ度會〻ハ伊勢外
宮鎮座の處の名なり内裏新
嘗會と同〻〻〻〻俗ホ御祭

と称と明十七日内宮ホあり事
実外宮と同〻事なり

(能)名そそ名かひしやう嘗会司風
神ホ米湖ひろふ世の天かりす東巴

十六日 江○芝神明祭 十一日より廿一
戸日迄〻祭礼の間甚賑ハ〻

寛仁二年九月十六日此處ホ鎮座
〻〻ホ生姜の市あり参詣の人
巣生姜と求めるり家毎ホ糠漬
の中ハ入漬〻仏と喰ハ年中
邪気感冒ハ愁ひ病のがふと
〻〻俗ホ生姜祭といふ

十六日 堺神明祭 大木辻天王祭 和 丹○大井大明神祭 波

△桂川御祓 桂川ハ大堰川の末
流そ松の尾より
南と桂川といふ伊勢の齋宮より
立ち〻〻皇女明十七日群行ゆく
前桂川〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻委
く次の野々宮の別の処ホあり

十七日 不成就日 京都 ○諏訪祭。六条烏丸と室町との間にあり

野々宮別宮

○伊勢大神宮の齋宮ふるゝせゝの内

親王三年ゝ間野の宮ふこりゝ物いとしめひて勢州へ旅立ゝ其ゝ天子ゝゝ櫛ゝゝて齋宮の頭ふゝゝせゝゝこれと別れ

その櫛といへ野の宮のゝゝ仏とゝへこゝゝせゝへ野の宮とゝゝれていゝゝへ行ゝへといゝゝゝ野の宮ハ小倉山の辰巳ゝる叢の内ふ古跡と残ゝゝゝゝも古ハ處と卜定ありてゝゝゝゝ

うれ結をうる地あるこや池田をくれその里ともいふ

十八日 大坂 ○今宮祭 神五座あり やぶさめ祭

○天王寺廻廊立花。十七十八両日人

○高津宮祭。夏祭六月十日あり

十九日 京都 ○南禅寺亀山院御忌 妙傳寺十面明神開帳

今日齊戒沐浴して心を浄くこれい吉事と得るなり

十九日 山城城南神祭 祭る処七社一下の鳥羽中嶋壇上。塔森。石倉。竹田。小枝の土人産沙神とまむう鳥羽上皇乃離宮あり是と城南の離宮やしびなりけ城のなるなし今い鳥羽帝とゆへなるなし今い鳥羽帝とあるをまるとゆへいう

十九日 波利女祭 高辻室町西へあり俗ふ繁昌の社といふて子孫のさくへと祈るなり此社の婆利女なりそれとしひ課アてハニヒヨといふ又それを云あやまりて繁昌とそなへく

十九日 京都 族夷祭 建仁寺門前へあり栄西国師勧請をる外まして旅行の海上へ祈むく人ハ先ッ此社ふ参つて風波の難をうゝん事といのるゆへふ旅ゑびすといふ一説十六日ともい

つりなくくゝ

礼記ふいぞ手面白さてくゝ諸国祭

十九日 山城八幡花頭 社僧弟子髪を剃て衆へ加る時草花と製ゝ酒宴催すへ花の臺ハ六月の日と名ゝみてたゝ

おくなり

能 花の咲舞ゝ

十九日 今日杞柳の湯そゆあるこもい来山無病長命うるといふ

廿一日 京○天道社祭。五条坊門猪熊有都○栢社祭。灰方の南林の内に有

廿一日 大坂上難波祭 俗に稲荷祭と云ふ博労町あり

本社へ仁徳天皇を祭る。稲荷は地神にして本社のかたへに鎮す。六月の御我神輿御旅渡御は賑はし今日は秋祭にて神馬の渡りあり

廿一日 江○根津権現祭。隔年にあり

廿一日 戸祭神社。博物堂に出ぜり

廿一日 城山淀祭 小橋の乾に有る淀姫神といふ傍に千観法師の宮あり又一座伊勢御門神祠といふあり又一座伊勢所楊枝島小橋の東河中にあり云々と摂社に淀姫の説まちまちあり又小橋の北に大荒木社とあり同日神事に寺又水垂に淀姫明神と云あり廿三日に神事あり是あるべし

廿二日 大坂座摩祭 摂州西成郡の惣社といふ今日の祭を相撲八十島祭といふ口傳へ六月廿二日御祓の時神輿を難波渡へ

廿四日 河内○植松村逆様祭。廿四日を祭礼として廿五日を宵宮とす

廿四日 江近逆神祭 大津相坂関清水大明神蟬丸の宮と称す此外古歌に詠ずる関の清水の旧跡あるよしいへ伝へて此宮のある外と今は清水町と称すと此宮の別当を近松寺と号して諸国説経者の本地とむりんぶ流して説経を以て世ををくる者此寺の免状とうけたるよしへ説経者日暮小太夫の請る正徳二年の免状とまのあたり見うまつりの日は説経者来りて神輿を供奉する例なり

廿四日 山城木幡祭 今は五月と廿五日と委

廿五日 不成就日 大坂△天満流鏑馬やぶさめの式あり

廿六日 京都△北山祭 洛北衣笠山世寅乃林中ふあり六所明神といふ又北山天神祭といふ〻拜殿まと三番叟あり祭廿七日とも云

廿七日 大坂△津村祭 ○津村御夷祭。鑑倉権五郎景政の夷と祭る故ふ五郎の社とも いふ中世ようり中央天照太神左ハ八幡宮右ハ鎌倉権五郎都合三座あり

廿八日 京都△鳴滝祭 △福王神祭。福王子社鳴滝社と合祭るといふ福王子ハ初め歩荒神と云一ゞ福王子と轉化せるとし云説あり神体ハ光孝天皇の皇后班子を祝ひまつるとそ京俗ふ五器あるひまつるといふとうや

○東山大谷報恩講 廿七日廿八日〻 ○醒井荒神祭 ○油小路火の尊祭

廿八日 大坂 ○晦日 石の鳥居神送り

廿九日 小ふくしい廿九日〻す ○今日風雨あるい水難あり ○今日能々身を慎

○今日ハ夢窓国師忌 天龍寺 相国寺等持院等すて執行あり

廿日 △住吉神送 摂州住吉ゑそ今日玉出嶋御祓の神事行つるゝ神祕あり神送るといふ事社記ゑ見えず十月と神無月しゝるへ神々出雲ゑあつまりあふゝ〻俗説ゑよりて今日の神事ゝ俗ふ神送ゝ〻ゝ神無月の十月の部並日本歳時記ふつゝとゝあへふゝれと畧す

中己午 周防△山口祭 吉敷郡山口ふあり祭神住吉三社〻

月令

九月一ヶ月中ハ頒てゝ雜事景物を出せり

伊勢御遷宮

内外兩宮その外摂社ぐも二十一年を歴まゝ造營あるべき事なり九月をもつゝ御遷宮の月とさだまる

番船

△線番△早線。追線浪花より出る新綿を積む船と云と一時ハ菱垣船ハ積込み出船の吉日を定め纜を解く前後乃番を鼠と取て定る同日ハ出帆を江戸着岸の前後を爭ひ小ゝしても早く着岸をとる手柄なる出帆の見送餞別ハ船ハて種々祝ひて送るとゝ浪花を綿船迄世ハ十月ハ出帆をゝ追綿といふハ綿船出帆後踊より出る新綿を積む船と云

なり追綿番ともいふ追綿船ともいふなりこれハ十月乃季なるしてもなるべんか

俳 番船や枯芦見紀あり兎賈

一説に番船の出て日数も多くまたゝ午川番船やりの詩も作らんか平刀

落水

田の実のなるを落水といふ田ハ水を切ぬく事なり左ふゝ水を切ぬくとなれハ稲よくなるなり

俳 蕎麦水蓼麦一説に一日仕業れとゝ宗因 蕎麦

海嬴廻

海螺のかゝふ糸と巻席の上に廻り出ると勝る子兒童の戯へ三月日並記事ハ九月九日ハ限る事なり

秋冷の節より次へうけそおふ歌へ

新綿

此頃新しき綿吹出て賣買とる故季なり

晋ハ新綿の支ハ議と新綿
くゝ見て真綿のことゝ七月十六日
の処委　俳ハ新綿と訓て誌
くゝ七月十六日の季ハ新綿と
訓ていふときハ木綿のことく
(俳)ちゝ孫や西葉ハ夕ハ木綿のこと　故栖

時令

此部ハ九月時節ハ
ゝゝ支霜杵の支を出ス

暮秋　△秋の溪　△冬と待　△冬
ちゝ　△冬と隣　いぶと
も九月中頃ゝゝ晩日ゝゝの支を
ゝ部次の詞のきゝ　△部ーあゝ
俳の季ハ用ゆゝゝ哥ハ秋
の名残おーまゝ心と多くゝゝ

(哥)家集　秋の溪　正徴
ゝゝゝゝも秋の溪乃川ゝゝ
ゝゝゝゝひーゝゝ乃ゝ
正治百首　△の秋　慈鎮
△の秋ハ月ハかゝゝゝ
あーしハ逝ハ有明乃月

後拾遺　秋を惜　範永
おゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ秋をゝゝゝゝゝゝ

夫木　前中納言定家
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

金葉　中原経則
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同　暮秋虫　西行
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(詞)秋の九ゝゝ。秋の哥。
秋の別称。哥ゝ。ゝゝ。
△秋ゝゝゝ。△秋の記△秋を惜。ゆ
秋△秋ハ歩くゝ△秋ゝて△秋の列
△秋の名残△秋ゝて△やまゝぬ秋
△秋る秋△秋ハ後ゝゝ。長花ハ秋を
ゝゝゝ。霧ハ秋の名残をたてゝあよ。
虫ハ秋ゝゝ人ゝハ秋ゝる。かれく

ふるる露い秋のむさしみやく。霜に多くなる。時雨が冬をといそく

(俳) 秋なやたユのあるる臣を杜億
きくれ 新扶をなくれい経ふ老嵐雪

(狂) 商人惜秋　柳牙
あ紀人も名を初秋のまんあくい
よろけふむしーの孫をやそくらん

(詩) 暮秋五字對句

望極関山遠・菊枝花半在・
秋深烟霧多・霜樹葉全稀・

(詩) 仝七字對句　詩礎

半山雲影前・林雨水痕収・
十里風香晚・稲花山骨瘦・

季秋之詞　王維

荊溪白石出・荊溪ハ水ノ名　天寒紅
葉稀・空翠濕人衣・モヤカカタ人ノ
空翠濕人衣　コロモラヌラス
山路元無雨・コノ山ミチ

九月盡　九月晦日　公任

哥 ふつつ〜と秋の引ん我やてふ
今よりもたゝ雨やうせよ

新古今　閑九月尽　大政大臣

(詞) 秋ふり後の秋のかゝりを
ふの秋。晩のうをかゝり。よもす
ゆく秋もつきぬと世くろ

(連) 春日さへあるれ名残をゝ秋京養

能　やゝ秋なる月の明るに月の秋貞徳

秋の景人のちりくもむる奄二の帥　李由

狂　長月〳〵ゝ　ゝ　ゝ　

俳 芭蕉のやうなる葉にまつはれる蓮の花の開かぬ蓮二

露寒 秋の末かるるして露もむすんで霜となるゆへ此頃の露がさむくなりゆくを故法もさむしといふ

草木

此部ハ九月一ノ月諸のくさ木の類を名ずる

菊 史正志ノ菊譜ニ曰菊惟介烈高潔ニシテ百草と其盛衰と同ジクセズと云云 按ずるニ菊ハ花既ニ落ちてより凋むに至る迄九花と見る事四十日なり春苗と生ジ夏盛ニ秋花と開き冬実と結ぶ根と多く植まいの花葉質と変ぜず実と植まいの千塵万朶一幹ごとに姿態色香殊変ず実は仙家の翫弄不老延年の霊草こ

異名 日精本草ニ出ル○紫菊○艾菊已上本草ニ出ル○黄花月令ニ出ル○秋菊楚辞ニ出ル○其菊事文類聚ニ出ル○隠君子范蠡能菊事物異名ニ出ル○月孫陸龜蒙詩序ニ出ル○延壽客○離客○隠逸花韵府

和名 まつより草 ハ百夜草 星ミさき形見草 よりひ草 蔵王千代見草 中月上 ちきり草 かつらより草 ハ金草 ハ秋ちぐ草 秋きる草 の花 ハ花 山ハ草 長月花 いろで草 草のあるじ ハ花の精 ハ曽我菊 ハ承和菊 たれくさ ハ

註 ハ花の中 ハ才草 ハ諸木ハ先ずちきくハ諸草ハ名づく ハ義和菊 ハ黄蘂の事 ハ義和菊 黄菊を愛ーた ハ義和帝 ハ承和帝と申奉る ハ仁明天皇の御事なり

○桜ハ承和色とハ黄色とハ黄色ハ承和色と

西宮記ニ直衣の色

昏る秋以てこれは黄色決せり

哥　寛平菊合　はきり草

ことへらさの万代をふまさり草
あはひ〜紅葉ちへ〜葉く

藏三　星見草

庭りをふさ〜てへらや星見草
ものあいろ紅葉よそ〜ば

秘藏　かつ〜ら花

さらひこあ垂我宿のまをの門ふ
かつ〜ら〜ら〜ひ〜ていらてかをり

藻塩　たゝ〜草

ゆ〜ゆ〜ひ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

菜のうへも我りくゆひし菊ぢろ
こゝ、こゝ花の咲しなり　生

詞　山海のさゝ、秋の花。菜。よろ花の
きゝ。菜の一月。ちよ世の花。金菜。
八重かさなれる花。おみなへし。
菜のきゝ。ふる枝の菊。菊の白菊。
須に吹上の浜。紅葉の方。あゝろ
の浜。波ハふく世の新庵ふまれ。
古沢の池　下水ハ菊の下水。花乃
下水。老とせく。よ世紙ふくしる。
そそくらひとのふる。よ年の新
うつる。霧ハ雲のまよれる白よ。
雲のまれく白ひきまる。白ひきまる。
枕ハいく千年よろひとのふる。よ世。
幾秋。かきうるさよろひ。露ハ雲
ハ菊ふ紅葉孫ありさなくよりり。
ちこあみる。杉神ゆるく霜ハ色の
かゝるとゝと待り。うつろふそくの
こゝゝさくも。なさほとゝせる待り。
○九月九日ハ九ノ人ふとさかりるふ人ハ

節のふゝ人ふとる菊ふ九ふとよくを人
九月九日のふゝ十日よりハ待菊
よろてゝふとハ九日人。秋菊の
こと哥よハ秋の末又冬のそゝめ
いもよあう。いろうる人ハおく花
などむとふ屋ゝ

連　菊さけハ神ならうろ長恋　宗祇
かゝ衣ゝ長ゝ人きゝれかゝゝハ　肖柏

俳　疲ふらゝ菊の蕊ゝ　芭蕉
白菊ふ花の名ハ　嵐雪
菊ふ小判の手や菊合　志考
市ゝ小判の菊ゝ　越人
ふふふて人菊のつゝ　移竹
菊の香ふ人ハ花も清ゝ　樗良

狂　菊の花ふ花ふハかゝゝ
ゝゝ世ゝ花ゝ人ゝ　貞徳
ゝゝくゝと枝ふをうて人ゝ
費ゝせと弟ゝ　千山
花ゝゝハ人ゝて菜ハ花の花
肉ゝハ花の枝とつをく　貞室

詩　菊五字對句

露凝千片玉　曲池潔寒流

菊散一叢金　芳菊節金蕋

詩　仝七字對句　詩礎

植處清香依玉砌　青玉潤

摘来泛蕊滿金樽　碎金香

詩　白菊詞　魏舒

濃露繁霜着似無　コヽヤカナ

イレモ、白キクニ　オイテハイロカナイ

幾多光彩照庭除

コノキクハイカホドノ花ノ色ヤヒカリガアル

チコノニハノテラスヤウニウルハしウ之ヒロ

何須更着蜜兼雪便好叢

遶夜讀書ヤユキヲアツメルニ及ハヌ

コノ菊ノハナノ白イイロデヨルモ昏モツガヒラレル

菊合　殿上人の御遊そいうへを度々あり和哥を詠とゝ平城天皇大同二年九月幸仲泉池位已上共挾菊花二旨泰三年詔侍臣菊花献千株八尺左右番闘色香而擇其尤者栽之殿庭

菊花香　こくを炷く香なり

妙術　仙菊の方　黄菊と茯苓と松脂と九〻服をしい長壽之

菊酒の方　菊の莖葉ともに黍米まゞへ酒ふつくりの丸べ長命へ

菊品類　猩々羽　これを井大小猩々　醉楊妃　大白　白大　六代　小白　白中　楊貴妃　白色　金目　小白　銀目　黄色　銅目　白小　貫　黄大般　黄大　大般若　白八重　黄大般　黄大　よゝと大般　大ゝ　ゝつは　薄色千重大ゝ

かさこのつはいは花柄いろ　小紫　ひろさ紀ふとんくるとら〜

かも紫　ふすひ〜さ　きいふとん

くさひう〜　きらんも云　兩面　かさひろうろ　鳳凰　黄いろ　中さん

常盤　ふす紫ふとん花のくくふとうの　黄常　伏見　へるやどくろ

白〜　かとろの　ぐふふる

盤　十重黄　いろふとん　桐壺　ひさ紀中さん千重　有明

白十重　とこ　しいろのう　櫻菊　さくに似くう　銀　ぬさ紀中さん

総　白中つとん　うれさくく　三川咲分　黄〜ろ　咲　ちの　さやん

仙臺咲　ゆ〜さ　ちが咲さけ　唐車　いろ

大つとん花形九ようく　ふ四ふ似ふう　天人　ふすひ〜さ　き大さん

二重　黄色　天下　天人ふ似ふう　初心　亂　ふいはくみ　くさ〜

猩々　〜ちば　ふまのこる　一重猩々　ふすちば　小さん

石山　ひ〜さ　き中ろ　大朱柿　大さん　中さん　いろ

郭公　ひ〜さ　ふすう　小さん　三井寺　れ　あ

黄咲　とけ　末摘　半ひ〜き　ふすひ〜さ　ぬ　ぬ

ふるれ　ぬうす　ぬ　ぬ　ぬ

△岩菊花　花黄ニ一名泡ぎくとも云立花のくさ留ネンに用ひてはあざこの類乗い表青く背白し

(俳)泡ぎくの名ぶ西は許ハ

△蘆穂絮　二百余年前永禄年中まで木綿い日本へ種ご渡さず夫故真綿の外ふ綿し云物色ゟ論ず綿も布ふ穂絮を入て下賤の者ハ布子ゝそ着ようろて今も江戸ゟて中入綿とホウレン綿と云穂入綿の轉化せゝ蒲團も蒲の穂を用て造る故の名へ今も大坂ゟて木綿と織と布と ゟかと云ハ右の訳へ

(句)それもみるぶ名ゟ母のうとうたふいろ〳〵あゝれ花もうゝめ　光俊卿

(俳)子ゆゑ〻海園ふ海女の綿穂ふ宗鑑

右歌俳の故事と合てよろ次詳

△穂絮故事　孔門ノ閔子騫ハ云人母先タテラレレカバ父後妻ヲムカヘラレレニ閔子騫至テ孝行ナリレカド継母ハ二人の我子ヲ愛シ継子ノ閔子騫ヲ深クニクメル餘リ我子ニハ真綿ノ入衣服ヲ着セ兄ノ子騫ニハ芦ノ穂ノ入タル衣服ヲ着タリ父コレヲ聞テ後妻ヲ去ラントイハレケレバ子騫コレヲトゞメテイハク母在セバ一子寒ク母去ルトキハ三子皆ニ寒シト云テ母ヲ去ラルヽヲ止メ玉ヘト父ヲ諫レト傳

△薄散　花と云ハ枯尾花ゝ枯尾花ゝ薄散ゝ花と云ハ枯ろ薄ゝ犬の穂獣の尾ふ似ろ故尾花ゝ

(句)続千載　秋深ふ来ぬ末野の尾ふろ枯ゝ

(俳)秋ゝさの果ハ尾花の袖ゝ　素堂

△椿實　本字海石榴和名抄ニ出皮ゝむき仁と取ゝ搾て油

と取へ○千橘の説い畿内又い江東の方
訪ふ椿と木の実と云こいつ

橘子 異名 洞庭佳味 翁府○黄金丸 上同 霜朱 同上○木丸 本物○遺母 異名

○橘の説さまざまなれど多し先密柑
さりとて定むるべし 本草綱目二十四 會小出

橘の子として李部用ることは橘又い
盧橘として哥東能もに夏寺

密柑 紀州有田肥後八代を
寅上とさはるべし

能い姿のすぐれたるものにやまさり又蕉
吹あのめぐくといふ今の密柑に来鑑

柑子 橘の後ふ渡に物へ。萬
物語へそのの石のうへをとり
ひろ水い小柑子ムりのやわらかさ
まそこぶれかの○又謡曲の通小
町の文ふ大小柑子金柑とうと
つ京摂の俗年始ふ献るい小
柑子へ密柑ふまた賣りのい大柑
子へ密柑い皮薄く柑子い皮細密へ

乳橘 俗九年母と昏 能 九年
母やそろく其さ風の香芳

金柑 金橘と云 能 金柑や
ちるる清る上り信路静

○密柑ふ九年母。金柑の説
真渕の説い小柑子い金柑ちん

大柑子い密柑ちるべしといの
契冲の説い小柑子密柑大
柑子九年母なるべしといふ
つまう是ちるや

温州橘 其巣密柑ふ似て薄く
ハ其実形密柑ふ似
温州い漢土の地名へ此外ふ産
ちる橘い諸州ふもぞまてあち
美ちるゆへふ温州橘と
名ぢて名だかし

佛手柑 実の形人の手の如
指あり故ふ佛手
柑と云味よかす香気いと
昔日本ふみし近世さくい

枳殼　人家垣ふ植る俳かゝるえい　やうそくとも云　本草

榲桲　一ルメロハ蜜ゑ其実初め生ずる時毛あり熟すれ　いもゝ　信州ふ多し

俳　種金の釈迦と榲桲この多き蕉

南天燭子　実い赤小豆の如く数十　一ゆくまりにうてあり

瞿麦子桐實　天竺桂の実あさ　ぐの木と云うめ

蟬ふ制ずる物くやぶ肉桂とも云

俳　たるの実やしいたけ　古き恵乙由

皂角子　知名色英〈西毎子。　大木あり葉ハ槐ふ似

うう実いなご互のごとくさやと　垂る長さ尺余ふも及ぶ夏黄

白の花をひゝゝを

俳　さいしの長き線うれさあり竹夏

木蘭子　葉ハ藤のごと　俗ふ実

とツブらふへ是と念

珠ふ作る少く一名菩提樹とも云　うるべし　此実実のかゝふて我と

あゝえば甚能あり

俳　むくろこの実と拾て砕る衣い麻文

菩提樹　枝葉共ふ椿ふ似うう本帝二出　又一名ハ無患子葉ハ冬

青ふ似てやゝ尖長し実ハ枇杷ま

似うう念珠ふ作る俗ふ患悲と

名づく毗邪気とこくもこ云秘傳花鏡

今ハ京永観堂ふもありとぞ

川楝子　俗ふ此花と楝こいへ　真の楝樗とハ大ふ異

うう実と金鈴子と云形状ふよ

アその名へ葉種ふ苦楝と云

俳　実の釈ずくこの名ハ仏ハ杜国

ずくえい実ふて拾る果ゝ百州

桐油實　実ハ大く油ふ多く　アと或ハ漆ふかへても

用ゆる法あり其功荏油ふ似うう

本艸　蜀子桐虎子桐と云是へ

△椋實 木ハ榎の木か似て本ハ一種変生するべし実も文同し熟して黒く味甘し小鳥好んてこれと食ふ葉ハ物と磨き幹ハ杖ゝす珠と截盤持盤〻念珠ホも作るに用とす

事甚多しいづれも大木なり

(俳)椋の実ハ花ハ実とともに出これ雷白羽

△槙櫨實 高木あり花木瓜か似ゝ実ハ櫨樗か似て多くこれ千代ゝ〻

(俳)かゝ花ハ愛とべし

△栩實 又柞ともいふ但種類あつて実と結ぶものハ栩へ此実の名と橡とかさして和名つゝなゝへ黒色と澄る物へ栃半と つくりて栗ようの大さ葉の大さるハ七八すゝりて栗の同種異物なり 遠国山家これと麺とす ふ樺ようの延と手元の芭

せつきりの故世の諺ホトチメン樺と云と急なることのたとへ

(俳)山ふかき里ホせるく水さんん

(俳)ふるき実や一字て読す三大経其角

△北斗草實 実熟して赤く四時葉濃まる故ホ万年青の名あり唐ホハ嘉祝ホ見えたり

(俳)はむかしの実拾ふ物ハ月やそ

△栗子 (異名) 河東飯 (異名) 砂糖船 栗せる

先ハ栗子ハ果菓の最上ようと見えて唐の土にもこれと貴ふ漢本草商隠ク雑纂ホ富貴の躰と云しホ栗の皮と出せり千て臼ホて搗粗皮を取ると搗栗と云盤ようて打栗と云

(家)そそろ[illegible]ひろひのこせる杜やなめりん　爲頭

(俳)笠ふかちと栗の杜哉　由平
いら栗ふみくだくるあ流るる嵐雪
わたりかこうそく栗の落るを　芭蕉

(詩)栗五字對句
包刺如防患　朱夏滋栄日
雙肌似合歡　清秋結実時

同上

球栗　栗いがのそこ又一重そこのおるかいあり是をいがといふ

落栗　木ふあるを時そこがいこぢけてなのそこ地ふ落るをいふ

栃栗　栃栗。指の頭ほどあり小さく栗るう木ふ小さく

漸く三三　尺ばかりへ

菓栗　栃栗と称る下事なり

栗の下も板屋のあすへ　望翠
芝雲や芝のろ〳〵にやとつき　其角

栗子餅　栗と粉とをー餅ふまぶーる物へ

錐栗　形長ーし錐のごとく尖るるり本艸時珍說へ

三度栗　山栗にて少ー年ふ三度実のるへ上野の山中ふ多ー

榛子　榛栗。多ー故ふ榛ハミといふ　花の後ふい実を結ぶるー別ふ新枝の末ごとにかーれど

栗　ありて包む栗のごとく生食をるふ甚美なり

櫟子　いちいの実ハ悉皆櫟ふ似て分ちがと　○先の丸ふ毛のと如きりのいちいへカニふい毛の如きりの　椎のごとく炒りて食へ又凶年ふハ粉ーして食ふへ

(俳)ちつうと山屋ふ櫟のぬく李完

椎　落椎　椎いらふ。椎い実の名なり木の名ふハあーび

故ふ椎となづけひて実のこと
なる木の一名鐵樹といふ

(俳)足ひきの椎をさけ山ちるる白州
笑のうへ二足椎の附ふ所尚白

椎柴

△椎の葉△椎の小枝。
△椎の木。椎柴と云ハ
△(三秋)△凋てい椎。

椎の木の柴ふるくなる事ハ椎
至て小枝の多き物ゆへ山人の切り
て柴ふるへ併まで柴ふせざ
る事も椎柴とよめる事也あり
俳ふ秋とす哥ふ冬の題ふ詩り
△まそは椎ハ椎の大なるすり

(哥)後撰ワをなとハ娘ささうえ奚衣
のさうへるふのしいふるふ

拾遺 笑ふるおうへるふの枇杷の
さうへいとも いろいかりし

(俳)えんふ

團栗

△柳の実なり
弥宜の眼ふ
籌子小鬼貫

新胡桃

核果○陳倉巨宝
一種山ふ鬼ふる

しいふい上品へひめふる云ハ此中ふ
雑りて甚皮薄くて破やすし

○唐ふい白胡桃といふるもの
あるすや李白の詩あり

紅羅袖裏分明見白玉盤
中看郤無疑見老僧休念
誦腕前推下水晶珠赤キウス
ニアリテハアキラカニ見ユレトモ白キ玉
ノウツハニアリテハ見ワカラズトウヤラ
老ノウヒスイレヤウノビユスヲツヘグルヤウナ

新榧子

△大木多ー木ふ北ふ壮
しあり各花あれども
壮ハ実ふ結ぶこと
なし壮ハ枝横ふ
壮ハ枝上へ起る

(俳)榧のこと吉のふよ池絞紹簾
つやの実ふ成ふも齢ふ
ふられ暢中

新松子

△松ふもいふ又松ふ
又松の実としつふいまつ
つふて是を仁ともつふ

水木子 喬木こ葉梅りごとの也実も梅のごとく花藤ふて黄

俳 火とりえてこひめの木の皮を浸せ井蛙

茱萸 ○山茱萸○食茱萸 ○呉茱萸。ゐぢも種

類すり春繩さ黄花開き秋紅きこのる

俳 弘法てゐてくるされ小紫 水音

瓢樹 本名 蚊子樹 又イスノ木とも

いふ其実と蚊のやうと云

葉ふふま出ら物瓢簞のふと

くく胡椒の粉の器るにも用

又吹けい笛の音あり此木こ火

災と除うこ火と附け葉ふ

風て吹出して火と避く故庭砌

の生垣ふまふる元火除木

とひーこヨケの中器とこ

俳 ひえの垣ふ植てと考つ来山

榎實 胡椒の大ことして味

あまーー鳥こあつ

俳 花ふ核の実ふたくさん付蕎麦芭蕉

熟柿 烏柿○いろまも赤柿

と干して製ーこ物へ

柿ふ三秋の部ふも出せり

俳 腸ふ柿のこ

無花果 古名 花ふーーごりの。

いふ俗ふ唐柿といふ

花ふ咲こて実のこ真実枝間ふ

あり状木饅頭のこと

鵯上戸 本名 白英○一名鬼目と

但ーー白英ふ花ふつを

ての名るり鬼目ふ実とつう。

又ックミノイヒ子ともいひよぶり

好んて此実と喰ふ

俳 かこ

仙蓼 本名 珊瑚葉とかく俗ふ

赤ーて小さ花珊瑚珠のおこ小

うるい鉢へて愛とべー

○枝の節蓼のふくれ　故ふ仙蓼
異名ことなれの本邦にて実名と
うれしくて仙霊ともかくへ
(俳)仙霊の実ふ詠うへのもくひ三惟

晩稲　△晩田○いづ且也
かくく実のこ稲うり
(俳)稲のきはとかゆ田うるる考
枕頭の一衣いさ紅唐衣文龍

漆子　△漆掻○漆めるて
さも同訓るり汁い木
ちくいそ物てめるへ子ハ絞て
蠟ら台但し木ふ異種ありて
子こ汁く取る別あり
(俳)赤の枝ふ兵苗ゆ(漆子)紅宗因

紅葉　赤葉くもこ(異名)△色見艸
○妻恋草○錦艸ヒと藏玉出り
木の葉赤く又ハ黄ふるうしるて
いの紅イツルと法めそもつると
ゆふ此詞と俗ら紅葉て黄
変くもかく此ころ色づく葉ハ

○櫨○撫○拂○白膠木○漆○蔦
○柞○薛○櫻○梅○合歓○ちやき
ちの類るり
右の品々紅葉とつれば九月の季
なり其内楓の紅葉ハ別して人
毎ふ賞ふる故紅葉と云ハ楓の
事くるる哥ふ楓ふかうこ諸
木の葉の赤くるると紅葉く
いつり又紅葉とるくても。稍の
ちき又ハ。ちゆれる漆ふ稍る
ようでも紅葉のこくくるるり
○楓○ひさ花。そ。ま色ちるち
等ハ七月の草木の部ふ委く訳り
(哥)古今和歌集紅葉の哥へ
さほ山のちそのの紅ふちるめくと
ちるさくもちてとすり月ち
わくく山の岩ちれる系ふちるぬ
照る日れひうりるけくて
立田川紅葉ちくれてなるる
いくくハみきゆ中や絶なん

夫木　△蔦の紅葉

つたのこゝ嶋のの中ろふもみ葛も
秋こゝなれいそうりゆく　源師賢

金葉

ちくさなる梢やいろこはかつる
皆そめの系い紅葉にけり

夫木　△蔦の紅葉　家隆

つくのもみ葉のの紅葉にきろろ
郁ふおなきうの川のふう勢

新古今　△櫨紅葉

うつゝ嶋かくのふれそるとる紅葉
ちゝめ斗系は風そふく

夫木　△柞の紅葉　顕昭

松ふけふつふ樹ふのうめゝん
ひ紅柞まつきみちせう

仝　△まゆら紅葉　知家

人ちれを紅葉ふ紅葉みるろちの
細川まゆゝいろゝんれん

詞　木のしたもちち。まゝれあゝき。
きのちさき。枝のもちち。うすくる。

つろのちは。梢の紅葉。ゆゝ綺。京
のしたは。柏のもちち。まゝ紅のもち

△紅葉ふむ△下紅葉△水の紅葉
△きゝらる△むゝ紅葉

△紅葉橋　山路もゝもちとまろ
うりさゝ〜かりにに

△川の紅葉　秋ろべ冬ふろ
ハ非ろり　安元抄に出

△紅葉うれちる　もちちのをこつ
ちをいり

△紅葉焼　これい白氏天の詩より
そこ詞より

詩　林間煖酒焼紅葉　白樂天

△紅葉散　哥ふい　苔秋ふろくち
るやうにまれり　おられも

るへてい初冬ゝ　能の季九
月ゝも十月ゝもせり△紅葉きろ

ちろ又△紅葉ふうれ
紅葉ちろい十月ちゝ　九月ゝも

△紅葉の七宮　是い色汁の盃
ふ秋　ていふるべし

△紅葉の賀　花のおりゝゝの賀
のこゝ年もゝゝ月　といふ〜〜ゝ

俳　紅葉も来つく　後の紅葉小　支考
紅葉ふ流ふ俗ふ酒ふ　紅葉る東巴

「無のれふせりきこゆるの梅里
「義王のゝ移るよりの紅葉の囊中
「毋紀ハ祈の紅葉合点せと貫玉
「樣紅葉親ヘ切る藥もあり野明
「愛ぬれハ拔ヘかつちる紅葉時 叙々
「燭燭ふりうても赤し 櫨紅葉 李坡
狂 くゝてハ殊さらしくる尾山
けるとさうしくる余むの紅葉 木端

詩 紅葉五字對句

林端散餘綺 似燒非因火
木杪絢殘霞 如花不待春

詩 全七字對句 詩礎

紅霞迴遍吳江內 殘照晚
錦綺粧成蜀道中 斷霞秋

詩 紅葉詞 杜牧

遠上寒山石徑斜 ハルヘトウソ サムイ山ヘノ
ポレハイレミチガスキ 白雲生処有三
カイニツイテアル
人家 シラクモノ出ルアタリニヒトノ
スムイエカアルデカナ ブラブ
停車坐愛楓林晚 クルマヲトヾメ
オモシロク思フハモミヂ
ノハヤシノユフクレノケキジヤ
二月花 霜葉紅於
二月コロノ花ヨリモミゴトナ

尺牘 餽紅葉文

假山之ヘ楓光色欲然
折數枝以獻左右但
恐散飛愛護爲妙

尺牘 昏暗ヲ記ス 註解

光色欲然 楓樹掩映燦爛
○楓葉潤色紅煒々 ○霜
モミヂカイロツキイシテヨホドミコトニ
ナリ イシ仮

九月　草木

楓粧　色熒紅
ニシタニヨツテヨホド
テリトシタ

左右　為折一枝献恍鑒〇
アナタヘ　オメニカクトリ
ニシタ

荒庭幾枝聊殺芹意〇曲
テヤヘセニザイノワツカナモミチノヨダ
ナレトオメニカケルレルバカリジヤ

圃隅岡之楓為折一枝當
ハノウチノモミナナレドヒーヨダオツテオメニ

野献　但恐散飛愛護為妙
カケル　ナクヨリホユヨダイノヨリタサレイ

艶姸不耐数日移竹筒厭
ウルハシイヤウナレトイツカモモチハイタザスホドニ

風霜

色かへぬ松　諸木秋ふかみて枯るゆゑに松のいろ
ヘ

色かへぬと賞せり

哥　大木

ひさうさめるる松のいろ
ひさうさめるるなりゆけど

千載　藤原朝仲

色かへぬ松ぞ風の吹いて
ちるはけそのあ葉ぞ久々

排　色かへぬ松ぞ姿よと庭の松　撰調竹
狂　色も色も松ぞ色のきて松の色
ふかみてもなほ色ふかみても貞柳

詩　詩題

詩　全七字對句

濃霜満徑無紅葉　終待鶴
フカキシモミチニヨケドモ　ドコヘデハツルモ
キノウナ

晩日高枝有白雲　未成龍
ユフヨノタカキエダニシ　ニハナラヌ

詩　色不変松詞　無名氏

半依岩岫半是雲
リ半ブンハクモノカル　ハ岩ニヨリカヘ
ホドタカクエル

獨立亭々冒歳寒
ホンタチニタケ高クハエテ　ユキニトヲモレノイテ井ル

清節累一事頗為
コノ松ノヒトツノケツハク　ナニサホガカヘツテヒヤマ

秦時曾作大夫官
ニナツテ　レンノ　タイフノクハンヲサヅケラレ

ノトキニ大夫ノクハンヲサヅケラレ
タガニンゲンノ身ノウヘモコノヤウナ

破芭蕉　秋風ふやぶるゝうき世のそらうるさこそふたゝんと多く哥ふこゝろ

俳　ほろゝかなる程ほやの破芭蕉貴

狂　社風ふあくそふ多くゝとやうれうまの芭蕉うる人　貞徳

千土生　千土田。稙。稲孫。稲の刈田より再ひ生ず

といふ古名あるゝあひもいろ

宇　堀川百首

見わたせは山田のひつちひこそへて稔ふいろるゝ秋ふ名るゝ

うら枯　蘭木のもつ葉ようの色つきかゝるをいふ

宇　夫木　寄草　小野の篠ふ枯

月吹くゝふ洗ちふの夕雲

俳　うゝ枯ふ笹ふかるひそう小加翠

うゝ枯やつまこそ松の濱ま　桃溪

緑豆引　豆引。小豆引。実のうるゝと此頃ひくゝ

蕎麥刈　俳　ほゝそろふて芳麦ふ刈の声此頃

草牡丹　紫衣菊。貴布祢菊。賀菊。緋絲菊。

京まて貴布祢菊といふ大和にて牡丹といふ中国筋まてシウメイ菊ゝ云北国ふて加賀菊ゝいふ

佛甲草　俗ふ岩蓮花といふ花ひゝさて実る

小蓮花　岩蓮花まて葉細長ゝ

蒟蒻花　むらさき色ふさく葉の長さ二尺ばかりにして天南星ふ似ゝうの月根を掘るうう

櫨實　櫨ふ俗字へいちゐの実ふ大ふ似ゝうう櫨ふ食ゝ毛ありかゝふ毛なゝ

△梅嫌　子を結んで経　(俳)梅りくれてうなうり多り　加生

△種植　○稷麥○油菜○蒿苣○芥菜○紅花○蚕豆○水仙○春菜○大蒜○小麥○大麥

右の品々此月種をまくべし

△移栽　○牡丹○芍薬○竹○其外諸の果木此月うへ

植てよし　月令廣義ふ出しう尚又種また是ニ果木うへ久の仕ゆう

諸茶此月取入ま干様等まで

委くは日本歳時記九月の処出す

草木用意

[菓木よく実をむすぶ方]

上十五日の内ふうゆれハ実多し又菓初て熟とろとろ雨手にてゆべし年々実多し

[実のつざる木ふ実の手法]のそいて

実のつざる木ふ実のるゆへふ実のる木とうゆへ

菓鳥の人ばざる法　熟とる時一ツ二ツ

と取ばざ一つとそも取ハ鳥ふ

生類

此部ふハ九月一ヶ月諸の生類を集めるす

△尾越鴨　山を越てゆふふ朝夕ふき間ふとろ

此とろに鳥ハ山のひくきと尾をとりこうふ

山のひくきと尾越ゆるゆへふ名づく其外説多し

(俳)尾とかふ鴨やとげを芝染国方

△熊栗棚かく　熊ハ冬ハ穴ふ入蟄して春を待て出て木ふのぼり好んで栗を食ふ又枝を折るべ鋪て石巖枯木の中ふ設く是を熊の架と云

(狂)白雪のふる木むろか栖こそ

大ふの然の空こそ為家

(俳)棚とかく然とふふ雪

△霜踏鹿　(狂)霜うれい尾ふ

あるくそ鳴うれい弘ふえ多り定家

(俳)杖ふう霜ふ鹿の弘ハ考ふ　乙由

月の鹿小粥 今せんや名の和奏

(狂) 鈴りりく茶碗 茶碗若葉るあかる春も

むれふくまくまくま

方角　○家普請他行南方北方ハ大凶ス

破軍向方

夜九ツ子ノ方	夜八ツ巳ノ方	夜七ツ寅ノ方	
朝六ツ卯ノ方	朝五ツ辰ノ方	昼四ツ巳ノ方	
昼九ツ午ノ方	昼八ツ未ノ方	昼七ツ申ノ方	
暮六ツ酉ノ方	夜五ツ戌ノ方	夜四ツ亥ノ方	

日刻　○酉日戌日。酉刻戌ノ刻。事ニよりて用ゆべし

樂事　此頃やゝ秋冷ニて木々の葉ふくもに色づき野の気色小萩露草そのの咲初るよ浅茅もいろはきそめたる穂ふ出て尾花ことゝ夜ハさゆくの虫のひゝおとゝ聞ゆ露も中々ふくるまでさやかく物きこゆ月かゝる秋の空のあはれハひとつにかゝ

生花式正　○おもく○紅葉○鴨上戸○えゝづゝ○栗○南天○芦○岩菊○山ひゝら

衣服式　朝日より八日まで袷と着を九日より綿入と着こ袴ハひゝ色ハ○女衣服も是ふ同し模様ハ心ふ隨ふべし

紅葉衣　表こはゝ裏黄ハ一説表黄裏こはゝ

櫨紅葉衣　たゝて萼芳うゝ黄ハ

養生　此月陰旺陽衰ふ當ふ精を固し神を斂む

ゑゝ補養の茶と用ひて気と まもすべし座卧西南ふ向ふてゝ

又野外ふおゝひて血脉と養ふ ゑゝ風寒ふ感ゝやゝゝ時と考へてつゝむへゝ月の末ふ至り味の甘き物ととぶきて辛く又酸ゆき物と増して腎気を補ひ委ゝくハ延壽養生論ふ出を

蜜柑と夏まで貯ふる法　杉の箱の
うちに竹とともに紙いてつるをと
くして下家穴ぐらに入おくべし

佛所かさ年中貯ふる法　あつもりき椒と
唐さのまりと漆こてよくあり蟲
に入ふることとくしてやく

飲食

九月一ヶ月食物の
類とのろ発出も

新蕎麦　(能)新蕎麦や客も絵
紅葉と可由
新蕎麦と廉ふ時ふ紙
玄坡

柚味噌　(能)柚金。柚干
むりおろ陽明家へ
清水や柚こそふけて俗の上　才二名

とち餅　栃の実と持き浸し粉
くるみて団子とす

蒲萄酒　世俗の和制とる物を
好酒ふぶどうと浸し
置てもれとのめり漢土の制と
は異なるべし

九月飲食　料理献立

禁物　生姜　八九月多く食へば
春ふ至りて眼と病む毒
を損し筋力と減ずる妊婦
くれぐれ食へば生ず子六指ずしむ

○冬瓜今月食へば反胃と病む
霜ふりて後食べし　孫真人の説

好物　雉肉　九月より十一月まで食
料理　汁　稍補ふ他月は宜しからず

たらこ　くぐーは　やきえび
めうがぜ　ふかぶぐ　千房
ゆの皮
あわび白やき　くらげたら
ちめじ　まこんぶ
あろまそ　まのめ

膾　さよりくくけんぐ　ぐくうげ　が
大こん　ぐ　こ
ぜんご　ほづう
うど・ひじき
かんぴど

陸そら
葉付ぐ

麩のうつし　たらの目　ごぼう　木くらげ　えんぞく

なまこ　さとう　ごぼう　くろ　おろしだいこん　ゆ

ぶり　ごろくい　だいこん　ちやうが　ちくぜん　ゆ

ひきちゃぐち　三つ葉　こしやう

きんこ　松たけ　つぢらく　こしやう

たいこ　たいこ　もり　ほそ

差味　いせえび　小口切　くらげ　こんぶ　ぶり　こんぶ　ぶり　ぶり　いくづく　松たけ　たて　ゆ　ぐ　ゆ

清汁　こけの　子者

きそこ　あかい　だいこん　ぜうが　ゆのこ

あこだい　だいこん　えちぜうが　ぐり　あぜこかん

煮物　ぶんぐり　丸うこぶ　小口切　あこだい　たい　ぶり　こんぶ　ぶり　こんぶ　ぶり　ぶり　ぶり

差味

松茸　ふくりん　まつたけ
氷こんにゃく　ゆりね　まつたけ
清水がに・栗　まつたけ
わらびのり・蕨・
くるみ・きくらげ　まつたけ
ごまぶどう　ぶどう　ぶどう
河豚　ふんこうん　はも
ふきのとう　ごまとうふ

煮物

平かんぺい・梨　えび
やうだれ　ぶどう・いろは
ひらめ　竹鶴　ぶどう
ひいらぎ　干　ぶどう
やきいも　ぶどう

午房　ぶどう
あげくず　かやく　ふりせうが
たうあいも
まろ・ひいらぎ
ひいらぎ　ぶどう
松たけ　うす　ぶどう
梅かし　ぶどう　ぶどう
松葉　表ふりて
ごまめ　ぶどう

和會物

ふのり　ぶどう
きくらげ　ぶどう
ぶどう　ぶどう
ふきのとう　ぶどう
ふくりん　ぶどう
ぶどう　ぶどう
はんぺん　ぶどう
あがいも　小角切
ぶどう　ぶどう
松葉　ぶどう
ぶどう　ぶどう
うこぎ　ぶどう
ぶどう　ぶどう
松たけ　ぶどう
ぶどう　ぶどう
橘　梗のね
むかひ　ぶどう

吸物

松茸　ぶどう
まのこ　ぶどう
人ぶどう　ぶどう
ぶどう　ぶどう